

『大勢の群衆が集まり、方々の町から人々がそばに来たので、イエスはたとえを用いてお話しになった。5 「種を蒔く人が種蒔きに出て行った。蒔いている間に、ある種は道端に落ち、人に踏みつけられ、空の鳥が食べてしまった。6 ほかの種は石地に落ち、芽は出たが、水気がないので枯れてしまった。7 ほかの種は茨の中に落ち、茨も一緒に伸びて、押しつぶさってしまった。8 また、ほかの種は良い土地に落ち、生え出て、百倍の実を結んだ。」イエスはこのように話して、「聞く耳のある者は聞きなさい」と大声で言われた。9 弟子たちは、このたとえはどんな意味かと尋ねた。10 イエスは言われた。「あなたがたには神の国の秘密を悟ることが許されているが、他の人々にはたとえを用いて話すのだ。それは、『彼らが見ても見えず、聞いても理解できない』ようになるためである。」11 「このたとえの意味はこうである。種は神の言葉である。12 道端のものとは、御言葉を聞くが、信じて救われることのないように、後から悪魔が来て、その心から御言葉を奪い去る人たちである。13 石地のものとは、御言葉を聞くと喜んで受け入れるが、根がないので、しばらくは信じて、試練に遭うと身を引いてしまう人たちのことである。14 そして、茨の中に落ちたのは、御言葉を聞くが、途中で人生の思い煩いや富や快樂に覆いふさがれて、実が熟するまでに至らない人たちである。15 良い土地に落ちたのは、立派な善い心で御言葉を聞き、よく守り、忍耐して実を結ぶ人たちである。』

【説教】

本日の聖書の言葉は、イエスさまが語られた種まきの譬えが記されたところです。この譬え話の中で蒔かれた種は何を意味するかといいますと、それは「神の言葉」だと言われています。その神の言葉は、必ずしも良い土地ばかりに落ちないということを、この譬えは言っていますね。4つの種をまいても、そのうち3つが悪い土地に落ちました。神の言葉というのは、良い土地に落ちることの方がずっと少ないのだと言いたいわけですね。ここから、「一生懸命に種を蒔いても、良い土地になかなか落ちないなあ」と読む読み方も出来ると思います。「蒔く種は悪くないのだけれども、土地の方に問題があるのだ。」そのように、種を蒔く方に自分を置いて読む読み方ですね。

その一方で、中には種を蒔かれる土地の方として読む読み方もあります。「自分は良い土地じゃなくて申し訳ない。せっかく聖書の言葉を学んでいるのに、全然実を結ぶところまで成長しなくて情けない。」というような大変腰の低い謙虚な方もいらっしゃいます。そのような低い姿を前にしますと、自分も種を蒔かれる立場になり、少しでも良い土地になろうとする意識がなかったと反省させられます。やはり、ここはもう一度初心にかえって、頭を低くして聖書の言葉に向き合わなくてはならないとそう思われます。そこでもう一度、この聖書箇所を読んでみますと、いろいろと気づかされることがあります。例えば、種から成長して実を一向に結ばない理由として、14節のところに挙げられているものの中に、「人生の思い煩い」というものがあります。聖書には「神を愛し隣人を愛すること」を、何よりも大切なことだとして記されています(ルカ 10:27)。「隣人を自分のように愛しなさい」とも言われています(マタイ 7:12)。しかし現実の自分の姿はといいますと、人のことを思うよりも、自分のことで精一杯なんですね。日々の生活に汲々として心にゆとりがなく、まず

自分や自分の家族のことをなんとかするだけで1日が終わってしまいます。遠く離れた両親に電話の一本でもすれば良いのですが、そういうことにも気が回らず寂しい思いをさせているんじゃないかと思うと、心が暗くなって来ます。また、ここでは「快樂」によっても、芽が覆い塞がれてしまうことがあるのだとあります。快樂という言葉に辞書で引いてみますと、「瞬間的で一時的な楽しみとか喜びのこと」だとあります。これもよく自分に当てはまります。聖書を寝る前にしっかり読んで色々と1日のことを反省したりするよりも、テレビを見ながらお酒を飲んだりお菓子を食べたりして、パーとすべて忘れてしまうことの方がよっぽど楽しいですね。快樂というのはつまり現実の大変さから一時でも逃れるには、うってつけだということです。そしてもう一つ「富」ということも、これもやはり人間にとって大変危険なものとしてここで取り上げられています。お金や財産に縛られることなくその心配から自由になることこそ、私たちの心にとってとても良いことだとわかっています。しかし実際はそう理想通りには行きません。やはり少しでも豊かになったら安心できるのになあと感じてしまいます。将来の不安を解消するには、蓄えが欲しいと思うのが正直なところだと思います。

そんなこんなで正直に自分の心の中を吟味してみますと、このようにとても良い土地とは言えない現実の姿があることに気がつきます。「情けないな、惨めだなあ」と思いますが、しかしそのような悲しみを経験することも、これも何か意味があるのかもしれない。10節の所見てもらいたいのですが、その後半にはこう書かれています。「彼らが見ても見えず、聞いても理解できないようになるためである」と、そのように言われています。これは何を言っているのかと言いますと、目を見えなくしているのも、聞いてもよく理解できなくしているのも、それは皆神さまがそうしているのだということです。私たちの目がもし閉じているのであればそれは神さまがそうされているからであり、耳を閉ざしておられるのであれば、それは何らかの理由があるからなのです。「どうせなら、神さまがちゃんと良い土地に私を耕してくださいれば良いのに」。そう考えたとしても、そうなされないのは大切な神さまのお考えがそこにあるからなのです。私たちが理想と現実の間で思い悩んだり、葛藤をすること。思うように行かずにちょっとしたことさえも変えることが出来なくて、情けないため息をつくこと。これらの人生の暗い側面は、決して無駄なことではないのです。そういう人間の生々しい現実を身をもって知る事は、実はとても大切なことなのです。

悩むことなくいつも晴れやかな気持ちで過ごしては、決して見ることもない景色があるはず。日の光があたる明るいところではなく、一日中ずっと日陰のところを過ごしている人にしかわからないこともあります。こういう言葉があります。「名選手が名監督になるとは限らない」というものです。選手の時に才能豊かで輝かしい成績を残した人が、いざ監督やコーチになってみますと、うまく選手を指導することができないということが起こります。一方で、選手の時は大した成績を残すことなく早々に華々しい表舞台から退いた人が、幾人もの活躍する選手たちをうまく導いて成長させるということがあります。それは何故かと言えば、どこで人というのはつまづくのか、伸び悩むのかということ、自分の体験を通してよく知っているからです。才能豊かな人は決してつまづく事は無いので、どうしてそれができないのか理解できません。昔、思い悩んだこと、挫折することの方がずっと多かったこと。それらの苦い経験が、他者を生かすための肥やしとなってくれるのです。何をやってもうまく行かない人の気持ちがよくわかりますので、忍耐をもってその人を励まし支

えながら導いて行くことが出来るでしょう。これは、人生全体においても当てはまるわけです。人生の思い煩いや、富や、快樂にさんざん苦悩したからこそ、同じように苦しんでもがきあがく人の気持ちが理解できます。初めから良い土地しかない人には決してわからない、人がつまづくそのポイントが、どこに潜んでいるのか痛いほどよくわかるのです。

13節のところにごうあります。「根がないのでしばらくは信じて**も試練**にあうと身を引いてしまう人たち。」この場合もやはり同じで、試練から逃げてしまうことを経験すればこそ、試練の時に悩む人を励まして支えることができます。この試練に会うと身を引いてしまう人の代表として、ペトロというイエスさまの弟子がいます。ペトロはイエスさまが十字架につけられるといった最も苦しい時に、側にいることが出来ずに、恐ろしくて苦しくて逃げて行ってしまいます。イエスさまは、そのこれから逃げ出して行くであろうペトロに向かってこのようにおっしゃいます。「シモンよ、シモンよ、」シモンというのはペトロの本名です。そう呼びかけてこう言うのです。「サタンがあなたがたを小麦のようにふるいにかけることを神に願って、神はそれを聞き入れられた。しかし私はあなたのために信仰がなくならないように祈った。だからあなたは立ち直ったら、兄弟姉妹たちを力付けてあげなさい。」(ルカ 21:31-32)。神さまが、サタンや悪魔(12 節参照)を通して私たちを試練にあわせるのには、理由があるのですね。それはイエス・キリストの執り成しの祈りによって再び立ち上がったときに、同じように試練に苦しむ人々を力づけ、励ますことができるようになるためです。これがもし1度も逃げたことのない人だったらどうでしょう。どうやってその人を励ますことができるでしょうか。反対に「何であなたは逃げたのだ、それでも本当に信じていると言えるのか。」 そう言ってその人を責めてしまうことになるでしょう。そのようにならないで、弱い心根の人間の気持ちがわかるようになるための神さまのご計画なのです。

「50歩100歩」という言葉があります。50歩逃げた者も、100歩逃げた者も同じ罪には変わりはないというものです。しかし実際は、50歩しか逃げなかった者より、100歩逃げってしまった人の方が、その50歩分だけ余計にたくさん涙を流すことになります。悔しくて、恥ずかしくて、情けなくて、そのやるせない思いが多ければ多いほど、そのことを赦してくださったキリストに深い感謝と愛が増して行きます。ですから、うまく行かないことの方がずっと多い人の方が、試練に負けそうな人を支えるためにはうってつけの人材なのです。

このイエスさまのなされた種まきの譬えは、4つの種のうち最初の3つの種は一見無駄だったように思われます。しかし神の言葉は一度蒔かれたならば、無駄に終わるという事は決してありません。その1つ目の失敗、2つ目の挫折、3つ目の後悔があったからこそ、4つ目の良い土地に落ちるといったことが起こったのです。そういった意味では、1つ目の種も、2つ目も、3つ目のみ言葉も、全て4つ目の豊かな100倍の実りを生み出すことにつながっているのだと言えます。すべての土地は悪くもあつつ、しかしそれがキリストのとりなしによって、聖霊の働きによって、全てを良い土地に生まれ変わらせてくださいます。私たち人間の弱さは、神さまが働く聖なる場所となるのです。私たちの心が貧しく何もないからこそ(マタイ 5:3 参照)、イエス・キリストがそこに住んでくださいます。この神の言葉、キリストの福音の種を、私たちの心の深いところに植えつけたいと願います。